

コロナ危機の中での望星講座再開にあたり

# 「望星」、その思想と実践

## お互いを理解し、信頼する種をまく

望星学塾副塾長 松前柔道塾塾監、学校法人東海大学理事

### 橋本 敏明

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて本年2月から休止していた望星講座は、当面の間は集会型の講座は見合わせ、ZOOMミーティングアプリを使用したオンライン講義で開催することになりました。本講座では、コロナ危機の中での望星講座再開にあたり、東海大学創立者松前重義が平和思想と教育実践の場として望星講座にかけた情熱を、望星学塾の歴史とともに振り返りました。



橋本 敏明【はしもと・としあき】

1972年東海大学文学部文明学科卒業。76年の松前柔道塾開塾、82年望星学塾の再開などで社会教育活動に関わる。79年から87年の期間、国際柔道連盟会長を務めた松前重義博士の下で国際活動に携わった。

本日は、望星学塾記念館に仮のスタジオをつくりまして、ここから皆さまにお話をさせていただきます。ご承知のとおり、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、本年2月から望星学塾で開く集会型の望星講座を休止しておりました。事態が収束して、この集会型の講座が再開できることを願っていましたが、現在のところ、まだ当分の間は密閉、密集、密接の三密を避けなければならない状況が続いております。それに加えて人の移動もリスクを伴います。

そこで、9月以降の望星講座は当面の間、ZOOMミーティングアプリを使用したオンライン講義で開催することといたしました。本日の講座では、コロナ危機の中での望星講座再開に当たり、あらためて創立者松前重義の望星講座に寄せた情熱について振り返ってみたいと思います。

●望星という言葉の意味  
まず最初に、皆さまがよくご存じの望星という言葉の意味について、創立者・松前重義がどういう意味でこの言葉を使ったのかというところを確認したいと思います。

「若き日に汝の思想を培え、若き日に汝の体躯を養え、若き日に汝の智能を磨け、若き日に汝の希望を星につなげ」という4つの言葉は、望星学塾のMottoであ

り、東海大学の教育の指針を示す言葉です(図1)。

望星学塾記念館に掲げてあるこの書の言葉は、昭和30(1955)年5月5日に書かれました。その翌日の5月6日は、東海大学が建学の地、静岡県清水から東京の代々木に移転をして、初めて入学式を行った日でした。その入学式は、少ない人数で行われたものですが、その前日に松前重義が書いたのが、この力強い言葉でした。

望星という言葉について松前重義は、望星学塾の入り口に設置している「望星学塾発祥の地」記念碑の碑文の中で、「望星の名は汝の希望を星につなげに由来する」と明記しています。

戦前の望星学塾は、1935年6月に

**第444回望星講座(ZOOMミーティング)**  
コロナ危機の中での望星講座再開にあたり  
**「望星」、その思想と実践**  
お互いを理解し、信頼する種をまく

- 1. 「望星」という言葉の意味について
- 2. 実践としての「望星講座」
- 3. 強い危機感と信念

● 望星学塾副塾長  
橋本敏明

図1

浅野博士奨学祝金を基に建てられました。ここで行った教育活動の指針が先ほど述べた4つの言葉になります。

「望星という学塾の名は遠大な理想への献身をあらわすこの最後の一句、汝の希望を星につなげ」に由来しているのです（「無限創刊に寄せて・望星学塾の由来とその精神」1986年）

このように、たびたび松前重義は、望星についての言葉を残しております。

松前重義は、1946年に『望星』という雑誌も発刊していましたが、そこからも言葉を紹介します。

「青年の志こそは人類の歴史を動かす力である。聖書に曰く「汝の若き日に汝の造主を記えよ」と。……歴史はわれらに教えた。若き日に聖なる野望を抱きこの故に一身を犠牲にした者は歴史を動かし人類の進歩に偉大な功業を残し得たことを。青年諸君よ若き日に諸君の希望を高き理想の世界に繋げ。」（「青年論」1947年）

「汝の若き日に汝の造主を記えよ」というのは、松前重義が好んで読んだ旧約聖書の中の伝道の書12章1の言葉です。その言葉は、1955年改訳の『口語訳聖書』では、「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ」となっています。

松前重義は、大志を抱く、大いなる理想を抱く、ということを非常に大切にいたしました。

「大志を抱くは青年の特権である。……カント、アムンセン、ターヒー、内村鑑三、宮崎滔天……高き理想ではないか。清き夢ではないか。そして壮大なる雄図ではないか。……汝の希望を星に繋げ、詩と夢とは青春のものなり」（「汝の希望を星に繋げ」1946年）

これは先ほど述べた雑誌『望星』に書かれた随想の中の言葉です。こういった「希望」「星につなげ」という言葉を非常に好んだ松前重義ですが、土井晩翠の詩をよく読んでいたというのは周知のとおりです。東海大学の東海という大学名も土井晩翠の詩から取られています。

私は、最近、この土井晩翠の詩集を手にとり読んでおりました。晩翠が28歳のときに出版した第一詩集の題名は、『天地有情』と申しますが、最初が「希望」という詩です。詩の冒頭を紹介いたします。

沖の汐風吹き荒れて  
白波いたくほゆるとき、  
夕月波にしづむとき、  
暗闇よもを襲うとき、  
空のあなたにわが舟を  
導く星の光あり

私はこれを読んで嬉しかった。松前重義先生にお会いしたような気がしました。

た。先生のよく使われる言葉を、土井晩翠のふるさとに入つて見つけたような気がしました。

この「希望」という詩の最後は、「人の心に希望あり」という言葉です。詩が好きな方ならばお分かりでしょうけれども、何度も何度も口ずさんでいるうちに、愛唱する詩の言葉は自分の血となり、肉となつていくわけです。土井晩翠の詩と松前重義の言葉から、そういったことがうかがわれてきます。

### ●実践としての望星講座

ここからは、望星の実践として、望星講座の話を行います。望星講座は、講演という形で行われた教育実践の活動です。

松前重義は『松前重義と望星学塾』の思想と行動の中で、次のように述べています。

「小さな存在でもこれが大きな成果を生むのである。我々の使命は大学の建設だけで終わるものではない。大学の建設を通じて平和国家の建設、世界平和の建設を実現させなければならない。」（「序文」1986年）

大学の教育、研究を通して世の中にもどのように貢献するか、そして、いかなる方法で平和な国家、世界の平和を構築していくのかを、松前重義は常に考えていたのだと思います。

学園の中では、思想、人生観、世界観を育む教育として、「現代文明論」を開講し、社会の中では、望星講座を再開して講師として立たれました。我々は今、その実践の姿勢に学ばなければいけないのではないかと思います。

戦前の望星学塾で行われていた活動は、戦争のため期間としては短いものでしたが、次のようなことだったと言われています。

寄宿をする青年たち、そこに集まった人たちがお互いに学習をして、自らの人生の使命を見つける、人生観や世界観を育むという教育です。

望星学塾は、内村鑑三の思想を継承するものであり、デンマークの国民高等学校をモデルとした教育のひとつの試みでした。小さくても、組織的な教育活動でした。それが東海大学の母胎となったと言つてよろしいかと思えます。

大きな柱としては、日曜集会、賛美歌斉唱、講演、討論、それから、デンマーク体操が行われていました。外部での講演会、海外への伝道は、戦後の国際活動の礎となるものでした。それから出版活動です。そして、若い学生たちが寄宿して寝食を共にして暮らすということでした。

デンマーク国民高等学校の大きな特色は、教える者、学ぶ者、そういった人たちが寝食を共にして一緒に学び合うこと

2. 実践としての「望星講座」

望星学塾の日々...青年道場 (使命を見つける)
内村思想の継承...デンマーク国民高等学校を範として
①日曜集会(讃美歌斉唱、講演、討論、体操など)
②講演会③海外伝道④出版⑤寄宿塾生の養成

1939(昭和14)年11月
→翌年4月入塾式
同志青年の集まり



図2

です。これは現在の学園の行事では、学園オリンピック、あるいは望星丸での海外研修航海といった教育活動で継承されているのではないかと思っております。左の写真は当時の中庭で、今の望星学塾本館のところになります(図2)。写真では、ちょうど松前重義の姿が左側で切れていますけれども、当時の集まった青年たちと体操をしています。

松前重義が望星学塾を始めたのは内村鑑三が亡くなった後ですが、没後10年に当たる1940年3月25日から29日の間、神田佐藤新興生活館において、望星学塾の主催で内村鑑三を記念した「我等の世界観 望星講座」を開催しています。この日登壇した三谷隆正、政池仁、石原兵永は、内村鑑三門下の有名な人々です。

松前重義も「科学と世界観」と題して講演をしています。なお、この年の10月30日に刊行された『我等の世界観』は、復刻版を望星学塾で出しております。もし関心のある方はご連絡をいただければ、お渡しすることができます。

当時の厳しい時代の中で、思想活動を実践するのは大変なことで、それだけの信念がなければできないことであつたと思います。

●戦後に再開した望星学塾

さて、戦後の望星講座の再開は1983年からで、2月26日が第1回でした。松前重義が「軍拡による米ソの対立と人類の危機」と題して講演しました。当時は米ソ対立の時代で、このような時こそ、冷静な理性を持って時代の流れを見極めることが必要だという信念から始められたものでした。

戦後の望星講座の再開にあつての精神を、松前重義が好んで話の中で引用し、また書としても残した聖書の言葉で表しますと、「風を伺う者は種をまくことを得ず、雲を望む者は刈ることを得ず」となります。望星講座の本年度のモットーの「種を蒔く」も、この言葉の中から取らせていただきました。

東海大学の現代文明論は、この望星講座と軌を一にするものです。松前重義の望星講座は1990年6月が最後になり

松前重義塾長の望星講座一覧

Table with 4 columns: 回数 (Number), 年月日 (Date), 演題 (Topic). It lists 12 lectures from 1983 to 1990, including topics like 'Military expansion and the danger of human race', 'Current state and future of Japanese education', and 'History of turbulence and modern history'.

図3

ました。計12回の講座の演題は、図3のようになります。

講座の内容につきましては東海大学出版会から1991年に『松前重義望星学塾講演集 青春に生きよう』として出版しています。これも関心のある方で、読んでみたいという方がいらつしやいましたら望星学塾に問い合わせをいただければと思います。

また、現塾長の松前達郎先生も、1983年から2009年まで計26回、自ら望星講座の講師として話をされております。松前達郎先生の講演録も一冊の本にまとめております。

戦前における非常に厳しい時代の中で望星講座の開催、そして戦後の米ソ冷戦時代の望星講座の開催、これらは、い

ずれも大変厳しい時代背景の中で行われたものでした。そこには、今こそ私たち市民が理性を持たなければいけない、良識を育まなければいけない、それが平和への道につながるという、強い信念があるものでした。

●松前重義の危機感と信念

戦前の望星学塾の活動は、残念ながら日本が戦争の道に入っていました。で、塾生の青年たちも召集されるようになっていきました。

そして、これは国家権力、大権の乱用といわれましたけれども、松前重義自身も戦争政策、戦争の遂行への反対運動をしていたことで、二等兵として召集され戦地に送られました。望星学塾の活動も不可能になりました。

私は今、戦前と戦後という言葉を使いました。日本はちょうど戦後75年ですが、ある人の話によれば、その間、他の大国的ように戦争に入っていないから、戦前戦後と言ってすぐに分かる、その言葉が使えるのだと言います。このことは非常に重要だと思っております。

松前重義が二等兵として召集され、九死に一生を得て帰国した経験は『二等兵記』にまとめられています。苦勞の果てに、運よく松前重義の乗った船は撃沈されずにマニラまで着いたわけですが、そのときに家族を思つて詠まれた歌

が「ふりすてて出にしあとのコスモスは如何に堪えけむ武蔵野の風」というものでした。そして、もう命はないものと覚悟されておりましたので、「たとへ身は南の土と消ゆるとも永久に残らむ大丈夫の道」という歌も詠まれております。

戦争遂行に反対した松前重義の同志の間は、陸軍の中にもいました。その一人の塚本清彦中佐は、命令によってグアムに転進させられます。そして、玉碎されました。今グアムには松前重義が建てた塚本中佐の慰霊碑があります。その慰霊碑は、望星学塾の柔道研修プログラムで来塾経験のある人たちが時々清掃してくれているという話です。

●現代文明の3つの課題

また今日は8月8日です。私はひとつの感慨を持って今日の話を見せてもらっております。

1945年のこの日、松前重義は8月6日に広島に大変特殊な爆弾が落ちたことで、何が落ちたのかを調べに行くために政府技術院の派遣として現地へ調査に行かれました。

私は広島生まれで、母親をはじめ家族は全員被爆者です。父は戦地に出ておりました。私も被爆二世になるわけですが、被爆直後の状況については母親からも聞いております。また、原爆資料館で学んで大変な衝撃を受けておりました。

松前重義が著書に残した言葉では、「私はあまりの惨状に、かける言葉もなかった」と『わが昭和史』に書かれております。『二等兵記』には、「中央部は灰となつて何物もない」。『その後の二等兵』には、「広島に赴き、これが真の原爆なることを実証しようとした」という言葉があります。

言葉にならないというのが真実だっただろうと思います。最初に広島を調査をした科学者として、松前重義の戦後の活動の中にあつた平和への思いは、われわれが計り知れない強いもの、信念があつたのではないかと思います。

松前重義は『現代文明論』の序文の中で、現代文明の重要課題として「平和の問題」「人種の問題」「階級の問題」を挙げ

**「現代文明論」で**  
建学の精神を語る創立者

- 現代文明の重要課題
- 1. 平和の問題
- 2. 人種の問題
- 3. 階級の問題

→「教育」によって解決に取り組む。  
「歴史は大観すべし」

人と社会と自然が共存できる新しい文明社会



図4

げています(図4)。

この課題は、現在も解決されておりませんし、継続されているものです。この現代文明の重要課題をすべて背負っているのがアメリカで、今の混乱があるのでないでしょうか。世界の核保有国、経済的な大国といわれる国々も、この問題を課題として抱えていると思います。

松前重義は、教育によってこの課題の解決に取り組みたい、と考えておりました。そのために「歴史は大観すべし」と述べていました。

歴史はどのようにダイナミックに動いているのか、歴史の底流をどういう思想が動かしているのか、そして誰が、どのような勢力が何をしようとしているのか。松前重義は、大きく歴史を読み解く力が必要だと言っております。

核兵器の問題では、米ソ冷戦時代の1986年には、米ソを中心に最大で7万374発の核弾頭が保有されているといわれていました。2020年では、これが1万3410発に減りましたが、ロシアとアメリカがそのうち合わせて約9割、そのほか、イギリス、フランス、イスラエル、パキスタン、インド、中国、北朝鮮の9カ国が保有しています。

そして核保有国は、広島、長崎型より3分の1から4分の1の小規模の破壊を行う核兵器の開発配備を推進していると言っています。何という愚かなことだ

と思いますけれども、それが現実です。自国優先を唱える国々、政治家が多くなつていくと、偶発的に核戦争が起る可能性も高くなつていくのが現代です。松前重義の思想、東海大学の原点の言葉では、「人と社会と自然が共存できる新しい文明社会を築く」というのが、教育の大きな目標ですけれども、現実には厳しいものがあると思います。

●望星学塾の活動の使命

現代は、新型コロナウイルスのパンデミックによってあぶりだされた世界的な危機の只中にあります。われわれが理性を失わないように、良識を培うように何をなすべきか。そのひとつとして、小さな試みですけれども、望星講座は大切なものではないかと思っております。

「我々の使命は大学の建設だけで終わるものではない。大学の建設を通じて平和国家の建設、世界平和の建設を実現させなければならぬ」と松前重義は述べました。創立者のその言葉を肝に銘じて、望星講座の活動を継続させていきたい、そういう思いから今日は話をさせていたできました。

「平和の理想忘れしな」は、松前重義がわれわれに残した言葉のひとつです、これを心にとどめて活動を続けていきたいと思えます。本日はご清聴ありがとうございました。